

第175回定期演奏会 [振替公演]

2020年10月31日(土) 13:30開場 14:30開演

三井住友海上しらかわホール

指揮/角田鋼亮(当団常任指揮者)

©Hikaru Hoshi



生演奏でこそ伝わってくる、オーケストラという素敵な〈いきもの〉の魅力があります。セントラル愛知交響楽団の秋は、お互いの音楽を尊重しあう仲間たちだからこそ、親密で生き生きとしたアンサンブルを愉しんでいただけ、選りすぐりのプログラムをお届けします。

9月の第178回定期では、パリを舞台に花ひらいた名曲の数々をお楽しみいただいて…次なる10月31日・第175回定期(延期となった5月22日公演の振替公演です)は、イタリアにまつわる晴れやかな傑作たちを。

イタリアといえばオペラ…だけでは(もちろん!)ありません。美術の国でもあり、なにしろ風光明媚な土地ですから、古来とても多くの芸術家たちを惹きつけてきました。音楽家でも、イタリアに旅して魅せられたひとは少なくありません。

イタリアをテーマにしたクラシック音楽の名作は、挙げればきりがありませんが、今回の演奏会では、ちょっと面白い切り口で〈イタリア〉名作選をお届けします。常任指揮者をつとめる気鋭のマエストロ・角田鋼亮と共に、オーケストラの躍動を共有いたしましょう。

◆北と南をつなぐひと —— ブゾーニ《喜劇序曲》

「君よ知るや南の国…」というフレーズがあります。もとはドイツの文豪ゲーテの作で、遠い故郷イタリアへの憧れをうたう少女ミニョンの歌。オペラなどで有名になりました。

レモンの花咲くあの南の国、緑の葉かげにオレンジが輝き、青空にそよ風…。明るい南国イタリアのそんなイメージは、とりわけ北方の作曲家たちを喜ばせたようで、冬の長いロシアから訪れたチャイコフスキーは、《イタリア奇想曲》という明るい響きに歌はずむ名作を残しています。

いっぽう、逆にそのイタリアから飛び出して、異国でみずからの芸術を磨いた音楽家もいました。その代表格が、フェルッチョ・ブゾーニ(1866～1924)。

ブゾーニが生まれたのは、花の都フィレンツェの近郊です。両親ともに音楽家、父はイタリア人、母はドイツ系のひとだったそうで、彼も早くからピアノに作曲にと楽才を発揮、10代のうちから国際的に知られるほどの存在になりました。

ところが、青年期からイタリアを飛び出して、ドイツを中心に活躍したブゾーニは、演奏旅行でイタリアへ戻ることはあっても、故国に拠点を据えることは遂にありませんでした。20世紀初頭のイタリア音楽界は、ドイツに比べて遅れをとっている、というのがその理由だったようです。

なるほど、ブゾーニが多様な作曲作品に示した才能には、20世紀の革新を先取りするような視野が感じられます。と同時に、伝統的なものを大切に保守的な姿勢ももっていますので、双方のミックスされた、いま聴くといいよユニークな作品が揃っています。

今回の定期演奏会では、ブゾーニの《喜劇序曲》作品38(1897年/1904年改訂)という楽しい作品をまずお聴きいただきます。ドイツはベルリンに居を定めてしばらくしてから曲ですが、なにか特定の劇のための序曲ではなく、コンサート作品として書かれたもの。

どことなく、モーツァルトが20世紀に生きてモダンなオペラをつくったら、こんな序曲を書いたのかな…と思えたり(そういえばモーツァルトも、少年期から南国イタリアへ旅して、多くの実りを得たひとでした)。

それだけでなく、先人メンデルスゾーンの音楽から影響を受けているあたりも、明るい曲調のあちこちから聴こえてきますから、コンサートでのちにお聴きいただくメンデルスゾーン作品との響きあいを実感できるのも、お楽しみに。

◆今と昔をつなぐひと —— レスピーギ:《リュートのための古風な舞曲とアリア》第1組曲

イタリア北部・ボローニャ生まれのオットリーノ・レスピーギ(1879～1936)も、いつとき故国を離れて活躍していたひとです。

若い頃、ロシアはサンクトペテルブルクの帝室劇場オーケストラのヴァイオリン奏者として活躍しており、北国で故国イタリアのオペラを弾いていたレスピーギ。ロシア滞在中に、リムスキー=コルサコフ(チャイコフスキーよりちょっと歳下の作曲家です)にオーケストラの書法を学んだことは、のちのち《ローマの噴水》《ローマの松》《ローマの祭り》といったレスピーギの色彩感も見事なオーケストラ曲に影響を与えます。ロシアとイタリア…遠い国ですが、意外にご縁があるもので。

さて、帰国したレスピーギは、音楽院の教授をつとめながら多くの作品を書きます。音楽院の図書館で、古いイタリアの音楽をあこれ調べているうちに、その魅力に惹かれたレスピーギ。これは…という曲を集めて、現代のオーケストラのために編曲した組曲を創ることにしました。

それが、《リュートのための古風な舞曲とアリア》。3つある組曲のうち、今回の定期演奏会では、第1組曲をお聴きいただきます。

有名な《シチリアーナ》という曲が入っている第3組曲はしばしば演奏されるのですが、今回の第1組曲が取り上げられるのは、ちょっと珍しいこと。お聴きになると「こんなに楽しい作品がどうしてあんまり演奏されないんだろう…?」と、得をした気分になることはうけあいます。管楽器・弦楽器ともにソロも活躍したり、演奏家たちの室内乐的で繊細な表現も愉しめて、オーケストラをより親密に感じられる逸品だと思います。ぜひ生演奏で!

◆そして、輝きのただなかへ! —— メンデルスゾーン:交響曲第4番 イ長調《イタリア》

さて、次回定期の最後は、ずばり《イタリア》。ドイツの作曲家、フェリックス・メンデルスゾーン=バルトルディ(1809～1847)の代表作です。

38年という短い生涯を駆け抜けるなかで、明るい風の吹き抜けるような、はたまた詩情に美しい蔭の広がるような…爽やかな色彩感に優れた作品をたくさん残したメンデルスゾーン。彼も若い頃から、ヨーロッパのあちこちを旅したひとでした。

20歳の頃、彼は音楽家として必要な見聞を広め、教養を深めるために、ヨーロッパ大旅行へでかけます(なにしろ家が大変なお金持ちだったのです)。ドイツから、海をわたって英国はロンドンへ。そして、スコットランドへ…。荒れ果てた古城や、美しい洞窟のある海岸地方など豊かな風物をたずね歩きながら想像力を刺激され…交響曲第3番《スコットランド》を着想します。

ノートに新作のスケッチをとりながら、旅行を続けてやってきたのは、南国イタリア。ヴェネツィアとフィレンツェに少し滞在してから、ローマに半年ばかり腰を据えて作曲を続けます。

ところが、同地で謝肉祭の様子や教皇の即位式などを見ていたメンデルスゾーン、ここでまたまたインスピレーションを刺激されて、今度は交響曲第4番《イタリア》も書き始めてしまったのでした(おかげで《スコットランド》の完成は延びに延びました)。

北ドイツ出身の作曲家が触れた、南国の風と薫りと明るい日ざし。長い歴史が育んできた豊かな芸術遺産、風光明媚な土地の印象…。さまざまなものが、この交響曲に反映していることを感じられると思いますが、メンデルスゾーン自身がこの曲に《イタリア》というニックネームをつけたわけではなく、イタリアはあくまで作品誕生の背景。

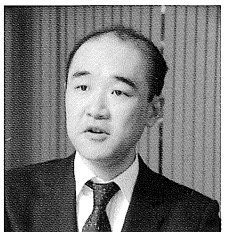
ですから、曲をお聴きになって、なにを(どこを)感じられてもまったくの自由です。コンサートホールでは、ぜひ想像の視界をお好みに広げていただければと思いますが、逆に、この曲を聴いてイタリアを想像するな、というのもちょっと難しい話です。

明るさがほとばしるような曲の冒頭からして、作曲家が南国で感じた印象も時を越えて瑞々しく伝わるよう。終楽章に至っては、イタリアの民俗舞曲《サルタレロ》のリズムで奏することが楽譜に明記されていますので、激しいスピードで踊られる舞曲から、イタリアの鮮やかなイメージが湧き上がることは、誰にもとめられますまい。

オーケストラがかきたてる、鮮やかな色と光とリズムの熱狂…次回もホールでお逢いいたしましょう。

やまの たけひろ 山野雄大

ライター[音楽・舞踊評論]。『音楽の友』『レコード芸術』『バンドジャーナル』各誌をはじめ雑誌・新聞への寄稿、テレビ・ラジオ番組での解説、CDライナーノート・企画構成、オーケストラやバレエ公演の演目解説、取材撮影など多数。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》司会・構成。



Profile